

平成九年た第一号

決 定

本 籍 金沢市東力二丁目二八番地二

住 居 金沢市北安江町四七九の九

請 求 人 廣 野 秀 樹

昭和三九年十一月二六日生

請求人に対する傷害、準強姦被告事件につき、当裁判所が平成四年八月三日に言い渡した有罪の確定判決（以下「原判決」という。）に対し、請求人から再審の請求があつたので、当裁判所は、請求人及び検察官の意見を聴いた上、次のとおり決定する。

主 文

本件再審の請求を棄却する。

理 由

一 本件再審請求の趣意

本件再審請求の趣意は、請求人作成の再審請求趣意書第1部、同第2部、上申書二部（平成九年一〇月五日付のもの及び平成一一年一月三日付のもの）及び再審理由の補充書第一部ないし第五部記載のとおりであり、その主張するところは必ずしも明瞭とはいえないが、要約すると以下のとおりである。

1 請求人は、原判決が認定した傷害及び準強姦の被害者安藤文が抗拒不能との認識はなく、また、安藤の同意が推定される事情を認識していたので、準強姦の故意がなかった。

2 安藤は、内心において、請求人から殴られることを予想し、覚悟を決めてい



た。

3 請求人は、本件犯行前約半年間にわたる安藤の一連の言動によって狂気に追い込まれていた。本件犯行は、安藤に対するそれまでの不信感と疑心暗鬼が頂点に達し、形容し難い恐怖感に駆られたことによる反射的行動である。

4 請求人は、本件犯行当時、同僚や上司らの悪意・悪霊に支配された傀儡のようなものであった。



5 請求人は、本件犯行当時、極度の過労のため思考能力が著しく低下していた。
6 安藤のわがままを矯正するため、そして、同僚や上司らの悪意・悪霊による支配から同女を救うためには、誰かが殴ってやるのが唯一の方法であった。

7 原判決が証拠として掲げている松平日出男、池田宏美、梅野博之、安田敏及び北野奈美の司法警察員に対する各供述調書の内容は虚偽である。

二 判断

請求人作成の前記書面の内容を総合すると、本件再審請求は刑事訴訟法四三五条六号に基づくものと解される。

そして、前記一は無罪の主張であり、同2ないし6の主張も、被害者の承諾の存在(同2)、責任能力の欠如(同3ないし5)、正当な懲戒行為あるいは緊急避難(同6)の主張とそれぞれ解釈することが可能である(なお、過剰防衛ないし過剰避難の趣旨と解される主張もあるが、いずれも任意的な刑の免除事由であり、右法条にいう刑の免除を言い渡すべき場合に該当しない不適法な主張である。)。

しかし、一件記録を原判決の訴訟記録と総合して調査しても、右各主張に対応する「明らかな証拠」、すなわち、原判決の事実認定につき合理的な疑いを生じ

させ、その認定を覆すに足りる蓋然性のある証拠は認められない。

また、前記一七において指摘する当該各供述調書の内容に照らすと、その主張は、およそ刑事訴訟法四三五条六号の「無罪若しくは免訴を言い渡し、刑の言い渡しを受けた者に対して刑の免除を言い渡し、又は原判決において認めた罪より軽い罪を認めるべき明らかな証拠」の発見に該当しない。

さらに、一件記録を調査しても、他に適法な再審理由の主張は見当たらない。

よって、本件再審請求は理由がないので、刑事訴訟法四四七条一項により、主文のとおり決定する。

平成一一年二月二五日

金沢地方裁判所第三部

裁判長裁判官

石山容示

裁判官

梅本圭一郎

裁判官

山本正道

右は謄本である同日同庁

裁判所書記官 高

見

